

厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）
「公衆衛生医師の人材育成に向けた好事例の横展開に向けた研究」
令和4年度 分担研究報告書

「公衆衛生医師の確保と育成に関するシンポジウムを活用した意見交換」

横山勝教（香川県東讃保健福祉事務所）、武智浩之（群馬県利根沼田保健福祉事務所）、宮園将哉（大阪府健康医療部保健医療室）、山本長史（北海道渡島総合振興局（渡島保健所兼八雲保健所））、町田宗仁（国立保健医療科学院・研究代表者）、吉田穂波（神奈川県立保健福祉大学大学院ヘルスイノベーション研究科）、名越究（島根大学医学部）、杉山雄大（国立大学法人国立国際医療研究センター研究所糖尿病情報センター、筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野・研究協力者）

研究要旨

【目的】若手公衆衛生医師の育成策における更なる今後の展開として、現場で試行錯誤を重ねている「若手公衆衛生医師のキャリアと育て方」について、シンポジウムにおいて議論・検討を行った。

【方法】第81回日本公衆衛生学会総会において、「これでいい！？若手公衆衛生医師のキャリアと育て方」と題したシンポジウムを開催した。

【結果】シンポジストからは、（1）公衆衛生医師が求められる能力についての解説と人材育成の具体的な取り組み、（2）自身が育てられた環境とそれを次世代に引き継いでいく手法、そして、個人の努力だけでなく周囲を巻き込み、環境を整備することの必要性、（3）自身が成長し、公衆衛生医師として視野を広げ、学んだことを社会に還元していくことについて実例を挙げ、今後への建設的な提案、（4）国としても人材確保と育成の取り組みを強く後押ししている、といった話があった。会場参加者からは建設的な意見や質問が多く出され、公衆衛生医師の確保と育成に高い関心が寄せられていることがわかった。

【結論】今回のシンポジウムを通じて、若手の公衆衛生医師に対する育成について、さらなる取り組みをしていく機運が高まり、今後、参加者や主催者それぞれのつながりの中で横展開に発展していくことが期待される。

A. 研究目的

新型コロナウイルス感染症のまん延は、健康危機管理の重要性を浮き彫りにした。一方で、その業務を担う行政機関に勤める公衆衛生医師人材の確保や育成については、長年の課題となっていた。

医師の確保については、医学部卒前実習や臨床研修プログラムでの公衆衛生医師の活躍が紹介されている「公衆衛生医師確保に向けた取組事例集」(平成 28 年・厚生労働省)を各自治体が活用しつつ、採用活動を展開中である。しかし、今なお全国の保健所の医師定員充足率は 7 割を切り、約 1 割の保健所では保健所長の兼務状態が続いている。一方、医師の育成については、平成 23 年度から地域保健総合推進事業「公衆衛生医師の確保と育成に関する調査および実践」を通じて、業務の紹介やキャリアパスに関するセミナーなどが行われてきた。また、平成 29 年度には事業の成果として「自治体における公衆衛生医師の確保・育成のガイドライン」が策定され、活用されている。さらに、近年は新型コロナなどの感染症や地震や水害などの大規模自然災害など、大きな健康危機事案が続発しており、公衆衛生医師に求められるコンピテンシーの更なる充実、強化が求められている。しかし、公衆衛生医師の確保や育成が十分に進展しない理由として、卒前教育において公衆衛生医師の存在が周知されていないこと、メンター的存在が少なくキャリア形成に不安があることなどが長年挙げられてき

た。

昨年度、日本公衆衛生学会総会において本研究の分担研究者が中心となってシンポジウムを開催して、公衆衛生医師に求められる能力やコンピテンシーについて議論を行ったが、今年度も同学会総会においてシンポジウムを開催し、本研究の中間報告を行い、それらに関連する内容についての各演者の日常的な実務経験を交えた発表を行うとともに、社会医学系専門医制度に沿って実際に研修を修了した行政医師の事例や、最近の人材育成等の施策の動きについても紹介することとした。

また、フロアとの意見交換を通じて、若手公衆衛生医師の育成策における更なる今後の展開や、現場で試行錯誤を重ねている「若手公衆衛生医師のキャリアと育て方」についても議論することとした。

B. 研究方法

日本公衆衛生学会総会において公募シンポジウムを開催した。

- ・第 81 回 日本公衆衛生学会総会
シンポジウム 12

「これでいい!？」

若手公衆衛生医師のキャリアと育て方」

- ・日時：令和 4 年 10 月 8 日 (土)

9:30~10:20

- ・場所：山梨県立図書館

イベントスペース

- ・座長：

国立保健医療科学院

国際協力研究部長 町田宗仁
 神奈川県立保健福祉大学
 教授 吉田穂波

・シンポジスト：

・「行政機関の医師が持つべき専門性・
 スペシャルティの育成方法の模索」

大阪府健康医療部 副理事 宮園将哉
 の予定だったが、都合により学会総会を
 欠席することとなり、

北海道渡島保健所（兼）八雲保健所
 所長 山本長史 が代理を務めた。

・「職員育成に理解のある環境～自治体
 内での公衆衛生医師への理解を深めるこ
 との重要性～確保、育成、定着」

群馬県利根沼田保健福祉事務所（兼）
 吾妻保健福祉事務所
 保健所長 武智浩之

・「臨床医から社会学系専門医へ～行政7
 年目で見えてきた新しい世界、新しい自
 分」

広島市南保健センター
 医務監 平本恵子

・「これからの国としての確保、育成施
 策について」

厚生労働省健康局健康課 課長補佐
 高橋宗康

今回、シンポジウムの参加者を広く募
 ることを目的にデザイン等を工夫したチ
 ラシを作成した。また、全国保健所長会
 の公衆衛生医師の確保と育成事業班が運
 営するブログに広報記事を掲載するとと
 もに、全国保健所長会メーリングリスト

等でも広報するなど、コロナ禍で十分な
 広報活動ができない中でも工夫しながら
 シンポジウム参加者の募集に務めた。



第81回 日本公衆衛生学会 公募シンポジウム
 厚生労働科学研究班「公衆衛生医師の人材育成に向けた好事例の横展に向けた研究」



シンポジウム 12		演者	
2022 10/8(土)	AM 9:30	01 宮園 将哉	大阪府健康医療部 副理事 行政機関の医師が持つべき専門性・スペシャルティの育成方法の模索
→10:20	第9会場	02 武智 浩之	群馬県利根沼田保健福祉事務所(兼)吾妻保健福祉事務所 職員育成に理解のある環境 自治体内での公衆衛生医師への理解を深めることの重要性～確保、育成、定着
山梨県立図書館 イベントスペース	連絡先	03 平本 恵子	広島市南保健センター 医務監 臨床医から社会学系専門医へ～行政7年目で見えてきた新しい世界、新しい自分
国立保健医療科学院 町田宗仁 machida.m.a@niph.go.jp		04 高橋 宗康	厚生労働省健康局健康課 課長補佐 これからの国としての確保、育成施策について

C. 研究結果

当日はおよそ 80 名程度の参加者があ
 り、会場内の座席は埋まって立ち見の参
 加者もあった。また、総会終了後配信さ
 れたオンデマンド配信により、さらに多
 くの関係者が視聴されたものと思われ
 る。参加者との意見交換では、それぞれ

の立場から考える公衆衛生医師の育成方法について相談や提案を受け、公衆衛生医師の特に育成に関心が高いことが伺えた。

○町田宗仁先生（座長発言）

・当シンポジウムは、令和4年度1年限りの厚生労働科学研究班が母体。公衆衛生医師の確保と育成については、セミナーの開催、ガイドラインの策定など、継続的に取組が進められてきた。しかし、コロナの流行により、保健所の行う健康危機管理、その業務を担う一職種である公衆衛生医師の欠員や、一人の医師が2か所の保健所を兼務している事例などもメディアで注目された。また、今回のコロナに限らず地震や水害などの健康危機事案がここ数年で続発しており、これらに対応する公衆衛生医師のコンピテンシーのアップグレードを要するところである。この人材育成に関する課題を扱う当研究班のメンバー構成だが、現場の公衆衛生医師、ならびに公衆衛生医師経験者が10人中8人と、班構成の多くを占める事例は、ここ20年間で初めての試みとなっている。

・今年度1年間の研究班だが、以下の5項目を行うことを目指し活動している。

1項目の過去の人材確保や育成の取り組みのレビューについては、月刊公衆衛生情報の11月号に掲載された。

2項目の好事例収集については、都道府県の公衆衛生医師確保事務担当者の皆様の協力のもと事業活動が進んでいる。

3項目の求められる能力やコンピテンシーについては、全国保健所長会の調査実践事業班と共に、検討分析を実施している。

4項目の調査事業については、これまでに取り組んだことのない調査にも取り組んでいる。過去に調査対象とした医学生に加えて、保健医療科学院の研修修了生、すなわち、公衆衛生医師に強い関心がある層に、望ましいキャリアパスや職務環境について尋ねている。今後、研究班の報告書などを通じて成果を公表し、今後のリクルートや育成に関する活動に活かしてほしいと考えている。

5項目は人材育成方策の横展開のためのコンテンツの作成である。

・当シンポジウムでは、当研究班の活動に沿ったトピックとして、

行政医師が持つべき専門性やスペシャリティについて、全国保健所長会の公衆衛生医師確保と育成委員会の委員長である、北海道の山本先生から、

技術職員である公衆衛生医師への理解を得て、いかに育成する環境をつくっていくのかについての経験について、群馬県の武智先生から、

行政に入職後の7年間で行政職員として育成され感じたことや、後輩に向けた今後の育成への提言について、広島市の平本先生から、

最後に、今までの人材確保や育成施策の振り返りについて、厚労省健康局の高橋先生から、

以上4名よりお話をいただき、会場にお集まりの皆さんと意見交換をしたいと考えている。



○山本長史先生



昨年の第80回の本学会総会において「行政医師が持つべき専門性・スペシャリティを考える」と題したシンポジウムが開催された。そのシンポジウムでは行政機関の医師が持つべき専門性やスペシャリティは社会医学系専門医のコア・コンピテンシーでほぼ網羅されているものの、その各項目には階層性や獲得の優先順位があるのではないかという提案があった。

今回は、それらの専門性や能力を若手医師が効率的に獲得できるよう、具体的に示すための事例集の作成を提案したい。この事例集の作成については、大阪府で先駆的に取り組みが進められていて、私たちもそれにならって取り組みを進めていきたいと考えている。この事例集で取り上げられる専門性や能力には、単に社会医学系の医師としての能力だけではなく、社会人や行政職員としての能力も含まれることから、それらも含めた行政機関の医師の専門性やスペシャリティを育成するために必要なツールを今後とも検討・開発していきたいと考えている。

○武智浩之先生



行政は臨床と比較して、医師が孤立しやすい環境だと考える。自分は行政職としてのスキルや立ち振る舞い方などが完全に欠けている状態で入職した。そこで必要なのは、上司（先輩）からの丁寧な個別指導だった。指導を受けられるかどうかは、その後の行政医師としての未来に直結するのではないかと。しかし、指導

をする側になると、指導することが思っていたよりも難しいことがわかった。

公衆衛生医師の育成をするためには組織内の環境を整備することが、最も効果的と考える。組織内の環境を整備するには、時間も労力もストレスも多くかかる。公衆衛生医師の存在が業務を推進する上で役立つ、ということを継続して実践していくことが、職場の環境整備をするには有効策と言える。緊急的な災害時対応や感染症対応で具体的に役に立っていくことに加えて、公衆衛生医師に面倒な業務を押し付けて良い雰囲気づくりをする中で、若手公衆衛生医師の獲得という成功体験と、育成で試行錯誤する悩ましい経験を共に積み重ねることによって部局内で公衆衛生医師の存在価値が高まると考えている。

育成は、自分が気づかないうちにしてもらっていることも多いと言える。モチベーションが高い公衆衛生医師が自治体内で増えるためには、育成された経験を共有することは、おそらく有効と考える。業務や活動内容を組織内外で認められるように配慮がされる、ということは職員育成に理解のある職場環境であるかを測るひとつの指標になると考えている。

○平本恵子先生



私は社会医学系専門医のプログラムを通じて専門医になったが、横断的なプログラムの中で課題解決能力やコミュニケーション能力が身についたと考えている。

その中で、パートナーシップの構築能力や教育・指導能力を高めるためには、専攻医の知識や経験を増やすだけでなく、周囲とのつながりを作り、個の成長と共に周囲も成長するプログラムが望ましいと考える。

私自身は、この研修プログラムを通じて人材育成のアイデアを創出しようとする人間に成長できたと思う。また、これがモチベーションや自己効力感に繋がっていると考えている。

○高橋宗康先生



厚生労働省は、公衆衛生医師確保として公衆衛生医師確保推進登録事業等、育成としてIHEATやDHEATなどの事業も進めている。このような取組によって公衆衛生医師の確保及び育成につながることを支援していきたいと考えている。

<総合討論の概要>

・若手公衆衛生医師からの質問

臨床時代は、生活のすべてが病院だったが、公衆衛生医師になって人として生まれ変わったという平本先生の言葉が印象的だった。私は全国保健所長会の事業で平本先生と一緒に仕事をするようになったが、さらに公衆衛生医師のすばらしさを感じているところ。

私は、若い医師がどのタイミングで公衆衛生医師になるとよいか迷ったときに、どのような言葉をかけるか考えることがあるが、平本先生が過去の自分へ声かけするとしたらどのような言葉をかけると思うか。

・平本先生回答

運命という言葉がそれにあたると思う。臨床医としての生活も順調ではあったが、家庭の環境変化に伴い機が熟して公衆衛生医師になった、と感じている。

もし過去の自分に声をかけるのであれば、いろいろな意味でよくがんばったねと言いたいし、自分のタイミングで入ってよかったと思っているので後悔はない。手術室や救急などの暗いところから明るいところへ、と人生が変わった。タイミングはその人によるものであり、回答になっているかわからないが、そのように思う。

・保健所長（県型）からの質問

この4月から保健所長として兼務となったため、仕事の負担が増えている。これをきっかけに後継の養成を始めた。このシンポジウムに参加して、さらに人づくりの重要性を感じたところ。大阪府の例も参考にやってみたいと思った。県内で勉強会も始めたが、保健所長のこれまでのキャリアなどの話しが中心になる傾向がある。どのように勉強会を進めていくのがよいか、助言をいただきたい。

・武智先生回答

群馬県でも勉強会はできたらいいと考えているができていない。自分の自治体の勉強会に加えて、全国保健所長会のイベントを活用して力を借りるのがよいと思う。自分のこれまでの経験を話すのもよいが、いろいろなイベントを活用する

ことにより、視野を広げることができるのではないかと思う。

・山本先生回答

地域保健総合推進事業のイベントに参加すると、いろんな他の自治体の先生方と交流ができるので、そのような機会も積極的に活用するとよいと思う。



・保健所医師（政令市）からの質問

10年程度消化器外科の臨床医をして、4年前に市に入職したが、コロナ禍で医師の存在がありがたがられていることで定着しているように思う。市には20代から30代の医師が5～6人いるが、若い人の養成に難しさを感じている。

武智先生の発表にあったように、飲み会に必ず出ることなどということは、前時代的なことであると思うが、若い先生への対応には苦慮しており、ワークライフバランスを求める人もいると思われる。ホワイトさを保ったままでどのように対応していくのがよいと考えるのか、ご意見を伺いたい。

・武智先生回答

このような質問を受けたことはないが、他の職員が残ってたくさんの仕事をしているのに先に帰るのは違うよねとは言うと思う。これもブラックなのかもしれないが、同じ職場の職員として一緒に働くものとしての視点が必要だと思う。

自分の所属にも2人の若い医師がいるが、いずれも小さな子どもを抱えているので、コロナ対応では私は恨まれているかも知れない。お迎えなど大事なことがあるときは先に職場に伝えることで、職員がそのつもりで対応できるとも伝えている。

（国立保健医療科学院院長の）曾根先生の言葉を借りると、これまで私も「キャリアパス」という言葉を何度も使ってきたが、「ライフデザイン」という表現の方がわかりやすいと言えるかも知れない。

・平本先生回答

臨床医時代は、脳外科で昼夜問わず、病院から呼び出されるようなブラックと言える生活をしてきたが、現在の公衆衛生医師の仕事は、働くことを計画することができる。相談できる仲間がいればたくさんの意見が出るので、解決できることも増えるのではないかと（若い人にエクセル表の作成を提案してもらい、仕事の管理をするなど）。

・高橋先生回答

言葉にすることが一番大切だと思う。後輩が先輩の背中を見るだけでなく、言葉にすることが大切。多いくらいに話し

かけたり、言葉にしたりすることが後輩のためになると思ってやっていた。



・国立大学教員からの質問

アカデミアと公衆衛生医師の連携について、インタラクションをどのようにしていったらよいか。

・山本先生回答

大学院（大学）で博士号を取って、論理的な考え方を身に着けたことは、自分の仕事に大変役立っている。そのため、大学の公衆衛生学教室と連携していくことはとても大切だと考えている。

○吉田穂波先生（総括）

山本先生からは、公衆衛生医師が求められる能力について解説をいただき、人材育成の具体的な取り組みについてご紹介いただいた。武智先生からは、ご自身が育てられた環境と、それを次世代に引き継いでいく手法や、個人の努力だけでなく周囲を巻き込み、環境を整備することの必要性をお話しいただいた。平本先生は、公衆衛生医師として視野を広げ、

ご自身が成長して学んだことを社会に還元していくことについて実例を挙げ、今後への建設的なご提案をいただいた。高橋先生からは、国としても人材確保と育成の取り組みを力強く後押ししてくださっていることをお話しいただいた。活発な意見交換をしてくださった会場の皆様感謝したい。

D.考察

当シンポジウムは第81回日本公衆衛生学会総会の山縣然太朗学会長のご高配のおかげで開催することができた。開催にあたり、内容を何度も研究班員で検討し、構成、発表内容を含めて直前まで何度も意見交換した。この意見交換を通して私たち研究班員の公衆衛生医師の確保と育成に関する考えが整理され方向性も見出せた。当日、シンポジウムには予想を遥かに超える大変多くの参加者が来てくださり、公衆衛生医師の確保育成に対する関心が高いことが改めてわかった。4人のシンポジストからの発表内容を受けての会場からの質問や意見は、とても建設的なもので制限時間いっぱいまで有意義な議論が展開できた。シンポジウム閉会後も会場参加者と座長、シンポジストとの交流時間も続き、今後の公衆衛生医師の確保育成対策のヒントを得ることもできた。公衆衛生医師の確保と育成が有効なものになるためには、両方が効果的に動いていく必要がある。

E.結論

今回のシンポジウムを通じて、公衆衛生医師の育成に関する機運がさらに高まったと感じられ、今後、参加者や主催者それぞれのつながりの中で横展開に発展していくことが期待できると考えられた。



F.引用文献

なし

G.研究発表

なし

H.知的財産権の出願・登録状況

なし